

## 中小企業のレジリエンス

現在多くの中小企業はコロナ禍により売上減少が続いている。そこで本稿では財務面から中小企業のレジリエンス（再起性、ストレス耐性）について考えてみたい。考察にあたっては、平成期間中（1989年度～2018年度）の売上高を基準とした収益性、安全性並びに安全余裕率（売上高が損益分岐点をどの程度上回っているかを示す指標）の推移を確認することとする（図表）。

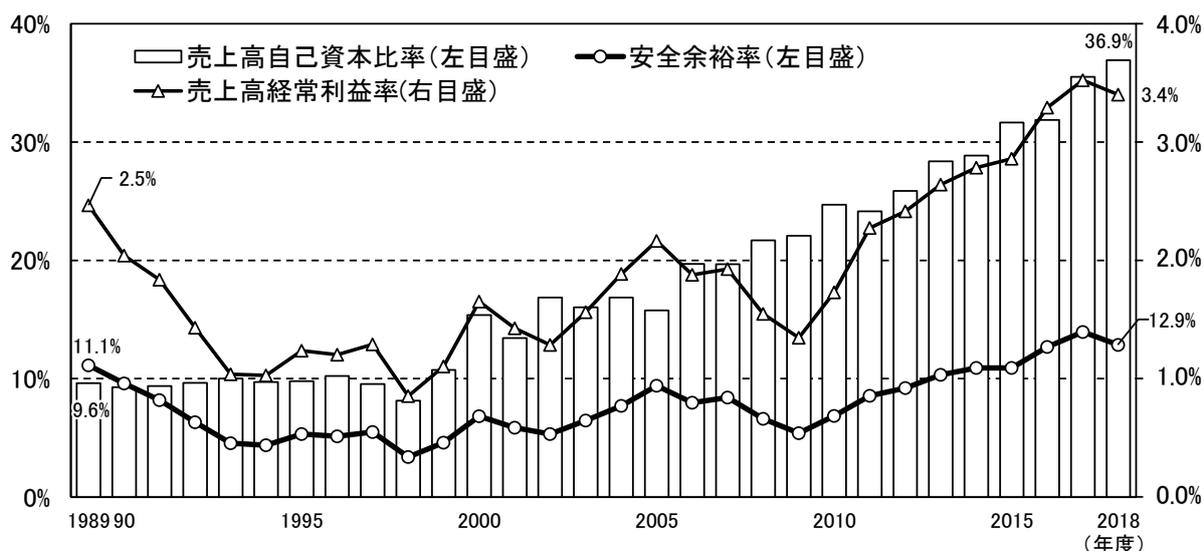
期間中の主な指標の増減についてみると、売上高経常利益率は2.5%→3.4%と収益性は相応に改善した。売上高自己資本比率は9.6%→36.9%と安全性は大幅に改善した。ところが安全余裕率については11.1%→12.9%と小幅な改善にとどまっている。大企業（19.2%→34.1%）との格差は一段と広がっており、その水準は低い。中小企業のストック面は強化されたが、減収ショック耐性は脆弱と言わざるを得ない。2020年4～6月期の中小企業の売上高は前年同期比▲17.6%、経常利益は同▲80.0%となっており、赤字転落が懸念される状況にある<sup>1</sup>。

現在中小企業は感染防止対策の強化、リモートによるセールスなど売上の回復に向けた様々な取り組みを行うとともに、業務の見直しによるコスト削減を進めている。国の施策である資金繰り支援、給付金、雇用調整助成金、経営相談支援等も最大限活用すべきであろう。

中小企業の活力を維持することができなければわが国経済の未来はない。当面の危機を乗り越えることが優先課題となるが、将来を見据えた中小企業のレジリエンス強化が望まれる。

（商工総合研究所 調査研究室長 筒井 徹）

（図表） 中小企業の収益性、安全性、安全余裕率の推移



（出所）財務総合政策研究所「法人企業統計調査（年次）」に基づき筆者作成

（注1）中小企業は金融・保険業を除く資本金1億円未満の営利法人。大企業は同1億円以上

（注2）安全余裕率 (%) = (売上高 - 損益分岐点売上高) ÷ 売上高 × 100 = (1 - 売上高損益分岐点比率) × 100

<sup>1</sup> 四半期データは資本金1千万円未満は対象外で年次データよりも資本金規模は大きい